

ナシの樹体ジョイント仕立て栽培の 鳥取県育成品種に対する早期多収効果

1. 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

神奈川県が開発したナシの樹体ジョイント仕立ては「整枝・せん定」をはじめとした作業の省力化や早期成園化が同時に可能となる技術として、全国的に注目されている。しかし、ジョイント仕立てに関するこれまでの成果は‘幸水’を用いて得られたものであり、本県の栽培品種に対する効果は不明である。そこで、本県の主要品種である二十世紀系の‘おさゴールド’及び普及が進む県育成新品種‘なつひめ’、‘新甘泉’についてジョイント仕立てによる早期多収効果を検証する。

(2) 情報・成果の要約

- 1) ‘なつひめ’、‘新甘泉’のジョイント仕立ては3本主枝と多主枝を交互に植栽する慣行植栽方法と比較して初期収量が多く、早期多収である。
- 2) ‘おさゴールド’のジョイント仕立ては慣行整枝（3本主枝）と比較して着果1～2年目の収量が少なく、3年目以降も同等で推移することから、ジョイントによる早期多収効果は低い。

2. 試験成果の概要

(1) ‘なつひめ’、‘新甘泉’の収量推移

- 1) ジョイント仕立て区は1年生苗を1年間ポット育苗した2年生苗をジョイント可能な樹間で定植し、棚下20cmの高さに主枝を水平に誘引して接木を行い完成させた（図1）。列間は4mとした。慣行整枝区は、3本主枝（永久樹）と多主枝（間伐樹）に整枝した樹を交互に植栽し、樹列間は‘なつひめ’は樹間5m×列間5m、‘新甘泉’は樹間4m×列間4mとした。いずれも3年生時から着果を開始した。
- 2) ‘なつひめ’、‘新甘泉’ともに、ジョイント仕立ては慣行整枝区と比較して着果1～3年目の収量が多く、両品種とも着果3年目で3t/10aを超えた（図2、3）。

ポット育苗(長い2年生苗を作る)

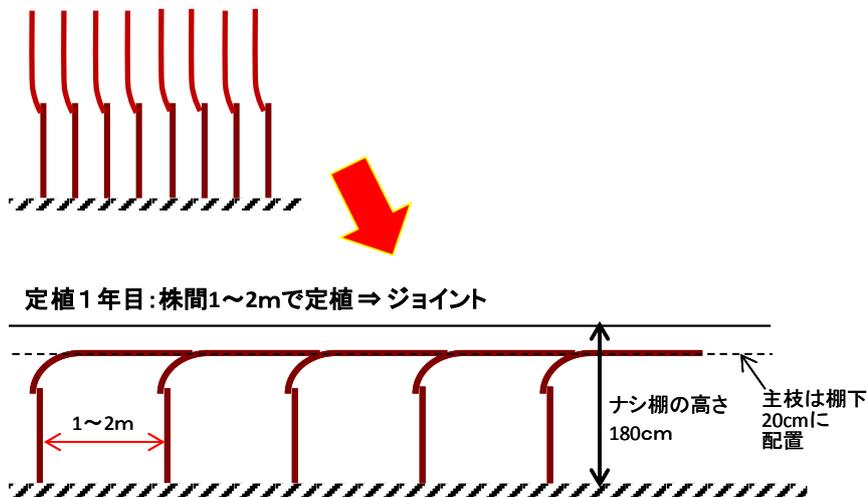


図1 ジョイント仕立て完成までの流れ

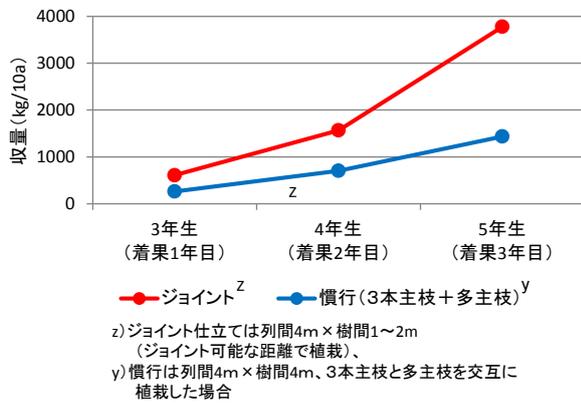


図2 ‘新甘泉’の仕立て方法が収量推移に及ぼす影響（2011～2013）

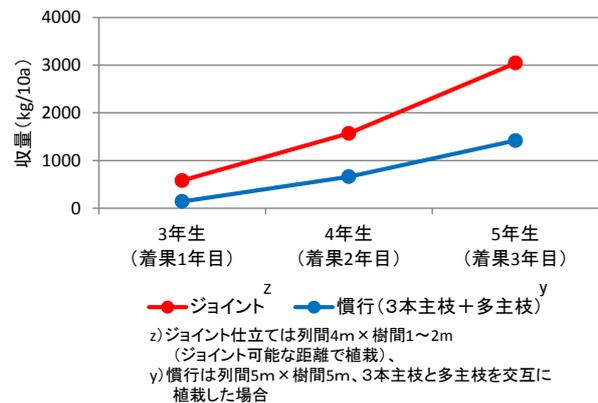


図3 ‘なつひめ’の仕立て方法が収量推移に及ぼす影響（2011～2013）

(2) ‘おさゴールド’の収量推移

- 1) ジョイント仕立て区は1年生苗を樹間 2.5m×列間 5.0m で定植した。3年間育苗したのち主枝を接木し、同年より着果を開始した。側枝の誘引角度について、主枝高 100cm から 45 度に斜上させる方法 (Y字区) と主枝高 180cm から 0度 (水平) にする方法 (平棚区) の2区設けた (図4)。慣行整枝区 (3本主枝) は樹間 5m×列間 5m で1年生苗を定植し、4年生から着果を開始した。
- 2) 着果1～2年目の収量は、慣行整枝区がジョイント整枝区より多く、3年目以降は同程度で推移した。ジョイント区の側枝の誘引角度の比較においては、Y字区の初期収量が多かったが3年目以降は同程度であった。以上のことから、‘おさゴールド’はジョイント仕立てによる早期多収効果が低いと考えられた (図5)。

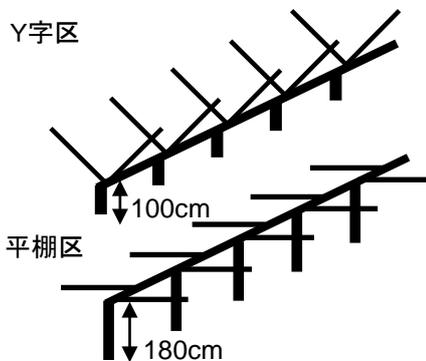


図4 ‘おさゴールド’ジョイント仕立てにおける整枝方法

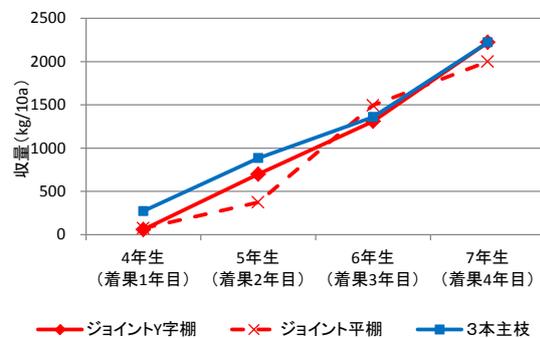


図5 ‘おさゴールド’の仕立て方法が収量推移に及ぼす影響（2010～2013）

3. 利用上の留意点

- (1) 本試験において設定した樹間および列間における結果のため、ほ場条件によって収量データは変動する可能性がある。

4. 試験担当者

果樹研究室 研究員 伊藤直子*1
 果樹研究室 研究員 高濱俊一*2
 果樹研究室 室長 角脇利彦*3
 果樹研究室 室長 池田隆政

*1) 現 東伯農業改良普及所改良普及員

*2) 現 西部農業改良普及所副主幹

*3) 現 とっとり農業戦略課専技主幹